

提出日：平成 24 年 1 月 20 日

青年期の自己愛傾向とナーチュランスとの関連

—共感性に着目して—

The relationship between narcissistic tendency and nurturance in adolescence.

—Focusing on empathy—

臨床心理学研究科 臨床心理学専攻 1000-100705 加藤舞

主指導教員 井上僖久和 教授

【問題と目的】

近年、児童虐待や育児不安、子どもや家族の問題が社会問題となっている。これらの背景として、親性の未熟さ、子育ての協力が得られていないことや親の自己愛などが関連していると考えられている。現代青年は、きょうだいも少なく、家庭内においては自分たちが優先させられてきた中で育ってきているため、母子密着が強くなり、家庭の中で大事に育てられ、赤ん坊のときのような全能感が壊されることなく成長しているなど、ここ数十年の家族の有り様や、家族生活を取り巻く社会状況の劇的な変化は、自己愛的な青年や自己中心的な青年を生み出した（町沢，1998）。また尾形（1999）は、自己中心性が高い者ほど、育児行動に対して消極的であることや親依存の育児意識が高い傾向にあることを明らかにしているように、親になることへの意識にも変革をもたらした。育児行動は、次世代を育てる極めて重要なものの一つである。そのため、親の子育て能力を向上させ親自身が成長するような支援が課題とされている（柳瀬，2002）。

親の子育て能力の一つにナーチュランスがある。ナーチュランスは、生涯発達の視点に立ち、多様な対象の健全な発達を促す能力と他者への共感性や応答性として捉えられているように、技能だけではなく、他者への共感性にも着目している（小嶋，1989）。相手を健全に発達させるために共感性は必要不可欠な能力なのである。ナーチュランスは、子どもの世話だけではなく、年下のきょうだいや友達、ペット、お年寄りとの遊びや世話など、多様な対象の発達を促す経験によって育成されていく可能性をもつ（蘆田，2010）。

共感性の発達を阻害する要因の一つとして自己愛がある。Kernberg（1983）が、病的な誇大自己は他者への依存を困難にし、外界を正しく認識する能力も失わせるために他者へ共感することを不可能にすると述べている。自己愛の高さは、様々な不適応を起こすとさ

れ、なかでも共感性の欠如は対人関係や社会生活において不適応を引き起こす。

以上のような問題意識に基づき、本研究では第1に、青年期の自己愛傾向と共感性及びナーチュランスとの関連について以下の仮説を立て検討する。そして第2に、性別、きょうだいの有無、ペットの飼育経験の有無、子どもと関わった経験の有無とナーチュランスとの関連について検討することを目的とする。仮説は①自己愛人格目録短縮版（以下、NPI-S）総合得点及びNPI-Sの下位尺度である「注目・賞賛欲求」得点、「自己主張性」得点が高い人は、共感性の得点が低く、ナーチュランスの得点も低くなるだろう。②NPI-Sの下位尺度である「優越感・有能感」得点が高い人は、適応的な自己愛と示されていることから、「優越感・有能感」得点が高い人は共感性の得点も高く、ナーチュランスの得点も高くなるだろう。③きょうだいのいる人及びペットを飼育した経験のある人、子どもと関わった経験のある人は、ない人よりもナーチュランスの得点が高いだろうである。

【方法】

2011年10月に関東圏内の私立大学生、大学院生を対象に質問紙調査を実施した。240名から回答が得られ、回答に不備があったものを除いた228名（男性43名、女性185名、平均年齢20.8歳）を分析の対象とした。使用尺度は下記の通りである。

- （1）フェイスシート：年齢、性別、所属している学部と学科、きょうだいの有無、きょうだいの位置（長子、中間子、末子）、子どもと関わった経験の有無、ペットを飼育した経験の有無について質問した。
- （2）養護性尺度：ナーチュランスを測定するために、糊澤ら（2009）によって作成された尺度である。4因子25項目で構成され、6件法で評定される。
- （3）自己愛人格目録短縮版（NPI-S）：自己愛傾向を測定するために、小塩（1999）によって作成された尺度である。3因子30項目で構成され、5件法で評定される。
- （4）共感性プロセス尺度：共感性を測定するために、葉山ら（2008）によって作成された尺度である。6因子30項目で構成され、5件法で評定される。

【結果と考察】

- （1）NPI-Sと共感性及びナーチュランスとの関連について

NPI-Sの得点を基に、「自己愛総合」、NPI-Sの下位尺度である「自己主張性」、「注目・賞賛欲求」、「優越感・有能感」をそれぞれ4分位領域で高群、中間群、低群に分け、共感

性プロセス尺度と養護性尺度との関係のパスを設定した。

パス解析を用いて観測変数の分析を行った結果、「自己主張性」高群と「注目・賞賛欲求」高群は、共感性を構成する認知的側面である「他者感情への敏感性」と「視点取得」を介さないこと、また、ネガティブな感情を共有することや同情することが苦手であり、結果として、相手の健全な発達を促すナーチュランスを低める傾向があることが示された。「自己主張性」高群は、他者からの評価を気にせず能動的かつ積極的に他者に対して自分の意見を主張する傾向にあることから、相手がネガティブな感情を示している場合においてもそれには共感せず、積極的に自分の意見を主張したりと、自己中心的な特徴を示すと考えられる。また尾形（1999）は、自己中心性が高い人ほど育児行動に対して消極的であることを明らかにしているように、本研究の結果においても、「自己主張性」高群は、ナーチュランスが低いことから、育児行動に対して消極的であると言える。中村（2005）は、「注目・賞賛欲求」が高い人は、他者が持つ自分に関する評価への関心が高く、自分の評価に関して他者からの視点を準拠枠としていることを明らかにしていることから、自分の評価に有益をもたらさない他者のネガティブな感情には目を向けない傾向にあると言える。このことから、他者の健全な発達を促すためには、他者のネガティブな感情をも感じ、その感情に共感することがナーチュランスを高めるためには必要だということが示唆された。

「自己愛総合」と「自己主張性」の中間群と低群、及び「優越感・有能感」中間群と高群は、他者の感情に敏感で他者の視点に立って物事を考えることができ、他者と同様の感情を感じる傾向にあることから、認知的共感性と感情的共感性を介してナーチュランスを高めていることが示された。

「自己愛総合」高群、「注目・賞賛欲求」中間群と低群、及び「優越感・有能感」低群は、認知的共感性を介し、他者のポジティブな感情に共感することでナーチュランスを高めていることが示された。「自己愛総合」高群は共感性が高く、ナーチュランスも高いことから本研究の仮説1を支持する結果とはならなかった。小塩（2007）は、「自己愛総合」が高い人は、知的で能力があると自己評価したり、自分自身を優しく寛大であるなど調和的な人物であると捉えることを明らかにしている。小嶋（2001）は、自己中心的で利己的な人は、「共感している」と思い込んだり、自分が他者に対して設定した自己中心的な目標を「健全な育成である」と思い込んでいる場合があると述べている。このように総じて自分自身を肯定的に捉えることにより、他者への共感性の高さや他者の発達を促せる能力があると自己評価することへ繋がり、共感性とナーチュランスを高めたと言える。

（２）過去の経験とナーチュランスとの関連について

性別および過去の経験と養護性尺度得点との差の検討をするために t 検定を行った。その結果、子どもと関わった経験のある人はない人よりも、養護性尺度得点全てにおいて有意に高かったことから、ナーチュランスを高めるためには子どもとの関わりが重要な要因の一つであることが示された。子どもとの関わりがナーチュランスを高めるという結果は、仮説３を支持するものであるが、きょうだいがいる人とペットの飼育経験がある人の方がナーチュランスが高いという仮説は支持されなかった。子どもと関わった経験のある人の高いナーチュランスは、将来自分が親になったときに我が子へ向けるナーチュランスとして転移する可能性があることから、親になる前にナーチュランスを高める経験をすることは重要である。

また、女性より男性の方が養護性尺度下位尺度の「技能」と「準備性」が有意に高い得点を示していた。従って、女性より男性のほうが、子どもに対する技能に自信があり、将来的に親になって子どもを育てようとする傾向が高いことが示唆された。

【今後の課題】

本研究の結果、「自己愛総合」高群は共感性が高いことからナーチュランスを高めていることが示された。「自己愛総合」高群は、総じて自分自身を肯定的に捉える（小塩，2007）ことから、他者への共感性の高さや他者の発達を促せる能力があると自己評価することへ繋がり、共感性とナーチュランスを高めたと考えることはできるだろう。しかし、「自己愛総合」高群の自己評価の内容は、友人からは必ずしもそのように認識されているとは限らない（小塩，2007）という研究があるように、自己評価から本質を探るには限界がある。この点に関しては、今後、質的と量的の両面で検討する必要がある。